

水不足：中国、アフリカ、そして日本

Abstract

「水問題」と一括りにいってもそのスケールはいまや世界規模で、またその問題の種類、原因・背景、被害の規模も実にさまざまであり容易に解決できる問題ではない。近年ではメディアによって、洪水や水没などの「水害」、干ばつや清潔な水が確保できない不衛生な環境といったような「水不足」等、数々の水問題が取り上げられているが、これらの問題には近年顕著な気候変動との相関がみられている。中国やスーダンはまだに今水不足に直面しているが、日本にいる我々にできることは、問題を悪化させている環境破壊の歯止めにつながるような「水」意識の改革、水に対する姿勢の改めではないだろうか。

「水」に関する“今の問題”：その現状と対応策

「水害」の深刻さも無視できないが、ここでは世界的規模の水問題の中で特に「水不足」に焦点をあてたい。というのも人間を含むあらゆる生物は水なしには5日も生きられないからである。以下には世界中の水不足のなかである二地域、中国とアフリカ・スーダンにおけるその問題と対応策をまとめる。

今中国で何が起きているのか。今年北京オリンピックが開催されるこの国を襲っているのは深刻な水不足。北京北東に位置するある村では「五輪で必要になる選手、役員、観光客のための水を確保するために」という理由で東京ドーム1000個分の広さに相当する水田が畑にされた。これにより米の栽培ができなくなった農民は経済的ダメージもうけている。中国はもともと長江以南に水資源が集中しており、北部は慢性的な水不足に悩まされてきた。ここへきて事態はさらに深刻になったというわけである。そこで中国政府も解決を図り、現在巨大なプロジェクトが実行されている。それが人口の黄河作り、「南水北調」プロジェクトである。巨大な水路を作ることで毎年95億立方メートルの長江の水を北部に運ぶというものだ。ダイナミックな対応策であるがここには大きな問題が孕んでいる。このプロジェクトによる生態系への影響、人民の強制移転、耕地の減少はもちろんのこと、もっと根本的に問題なのは運ばれていく長江の水量が減少していること、そしてその水質環境が現在良好ではないことである。汚水の原因はごみの大量不法投棄や工業化である。流量の減少により本来の水の浄化作用も低下するため悪循環である。この水質汚染に対してはまだ対処がされていない。

スーダン・ダルフル地方はというと、現在大干ばつによる被害が著しい。ここでの水不足は気候変動に大きな影響を受けており、60年代以降に気温上昇と雨の減少が

始まった。干ばつという問題自体が深刻であるにも関わらずこの地をさらに襲うのは紛争である。このダルフル紛争はダルフル地方の農民とアラブ系遊牧民との間でおこっているものであるが政治的要素が複雑に絡んでいるといわれてきた。それはある程度事実であるが、驚くべきことは国連がこれについて紛争の原因は“単に政治的要素に帰するものではなく、水不足による水の獲得競争もその原因の一つである”としたことである。紛争については国連が今までにも仲介による解決を試みたがいまだ終結をみていない。気候変動が紛争の一原因となっているのであれば、同じ時代に生きてその原因を作り出している先進国にも責任があるわけで、これらの国々には環境問題に対する迅速な対応が求められている。

今我々がいるところで何ができるか

日本は先進国の一つとして環境問題への積極的姿勢が求められている。水害だけでも今後南米・アフリカ海岸部で洪水、日本沿岸部で浸水、ヒマラヤの氷河の融解、そしてそれに伴うふもとの洪水等が予想されており、当然これらに起因する二次・三次被害で事態はさらに大きくなるわけであるが、これに加えて上述した地域やそれ以外における水不足も深刻であり、こちらへの対処もされなければならない。では今我々のいるところで何ができるのか。私は直接的なことは何一つできないのではないかと思う。しかし間接的ではあるが確実に将来的に良い方向につながることもある。それは「水」意識の改革である。

ここである興味深い記事について触れたい。去年秋、国連・持続可能な開発のための教育の10年（UNDESD*）の計画の一環として日本のある小学校で生徒に水の大切さを学んでもらおうという授業が行われ、そこでは日常生活の中で我々がどれくらいの水を使い、節水によってそれをどれほど減らすことが可能かを見る実験がなされた。シャワーの水を1分間出しっぱなしにしたり、マネキンを使って子供たち自身がシャンプーをしたりして我々がいかに日常生活において多量の水を使っているかを見て知ることによって水の貴重さを再認識させたのである。日本は水資源が豊富で我々国民は1年間に1人あたり実に1リットルペットボトル338万本分の水を使っている。地球上にある水のうち飲料可能な水はそのうちの0.01%にすぎないのにも関わらず、である。

ところで授業を受けた生徒たちは日常生活でする水の消費量の多さに驚きの声を上げたが、同じような実験を大人が見ても同様に驚くのではないだろうか。だが、私はその驚きこそが重要で、その驚きから我々にできることが生まれるのではないかと思うのである。最近多くの節約グッズが出回っておりそれらを使う人は多いが、その最大の理由は公共料金の節約であろう。結果として節水につながるのもそれはそれで素晴らしいことだが、ただ自らの利益のために節水をするのではなく、“なぜ”節水が大切なのか、“どのように”節水が、つまり「水」が環境をよくできるかを知ることが重要ではないだろうか。毎日朝起きてから夜床に就くまでにどれだけの水を使っているか、それを

どれだけ減らせるかをまず(驚きをもって)知ること、例えば実験では1分間シャワーを出しっぱなしにして10リットルもの水が浴槽にたまっし、シャンプーは水を出したり止めたりしながらすることで使用する水量が半分以下になったが、他にも食器洗い、洗濯、トイレ等を含めて一日単位、一年単位で自分が使う水量を知れば節水の価値が高まる。そして一人ひとりが節水をしたならば結果的に自分にも環境にもメリットが生まれる。この環境へのメリットは世界各地で水問題を引き起こしている環境悪化への歯止めになるのではないだろうか。

今自分がどう水を捉えているか再確認し、身近にあるから見過ごすのではなく、身近にあるからこそ水とこれからどう向き合っていくか、と考えるのは有意でかつ確実な水問題への対処の一つだと思う。未来を担う若い世代とその若い世代が手本とする上の世代の両方にこれからどれだけこのような水への姿勢を改めさせる機会が与えられ増えていくかが鍵となるだろう。

*UNDESD United Nations Decade of Education for Sustainable Development

<参考文献>

「深刻、水問題 都市化・人口増... 温暖化が拍車 今世紀半ば、40億人が水不足」
朝日新聞夕刊 4頁 2008年1月16日

「[中国疾走] 五輪前夜(1) 北京の水確保へ「人口黄河」 読売新聞朝刊 1頁
2007年12月25日

「(環境元年 第1部 エコ・ウォーズ:1) 消えた緑、水、平和 奪い合い衝突」
朝日新聞朝刊 2頁 2008年1月1日

「水とっても貴重 「UNDESD」環境教育プロジェクト=特集」 読売新聞朝刊 14
頁 2007年11月07日